

桜蔭俳話会 五月句会 (第三四五回) 鑑賞と添削

奉納の絵馬を離るる夏の蝶 明美

鑑賞・絵馬にこめた願が成就したのかどうか分からないが、夏蝶が絵馬を離れると見て取ったのは暗示的である。

鳶舞ふや若宮大路夏きざす 友子

鑑賞・天と地の配合が効いている。

鳩みくじ修学旅行の白帽子 ツル子

添削・鳩みくじ揃ひの白き夏帽子

旧美術館涼しさの影そのままに 朋子

鑑賞・旧美術館の収蔵展示方針に想いを馳せて、「涼しさ」としたのであれば、句意は判る。そうとすれば、「そのままに」が効いた精神性の高い句であろう。

吟行や風踏みながら汗拭ふ 邦子

鑑賞・正に吟行ならでは句である。「風踏む」の把握が良い。

峰雲や人力車夫のストレッチ 朋子

鑑賞・回って来た請記用紙では、「人力車」であったが、人力車という物体がストレッチすることはあり得ない。評者は「人力車夫」と補足して、特選句に推した。峰雲とストレッチとの配合が巧みである。

頼朝の海をめざしぬ青嵐 朋子

鑑賞・鎌倉の海、相模湾は詩歌では古来、「実朝の海」と形容されることが多い。しかし作者は、鎌倉の地で武家政権を目指した頼朝に因み、「頼朝の海」と規定す

木の樽に三年醤油若葉風 明美

添削・大樽の三年醤油若葉風

ふりむける少女の髪に風かをる 邦子

添削・振り向くる少女の髪や風薫る

石楠花や江戸町家より人の声 明美

添削・石楠花や江戸町屋より人の声

蓮池や若葉映りてゆらぎをり ヤエ子

添削・小々波の消えし蓮池鯉二匹

葉桜にお箸が似合ふ鎌倉彫 直子

添削・葉桜や鎌倉彫の箸と椀

葉桜や一直線の段葛 ヤエ子

鑑賞・曲がりくねった参道は元々あまりないが、「一直線の段葛」と言われれば、首肯せざるを得ない。

参道の屋台のキュウリ涼を呼び ツル子

添削・参道の細工屋台や大胡瓜

八幡宮の蘇生の公孫樹風薫る 友子

添削・八幡の蘇生の公孫樹風薫る

ひこばえや大樹の切株添ひて立ち ツル子

添削・切株の傍の細枝南吹く

新緑の奥に小さな籠り堂 明美

鑑賞・籠り堂の着眼が良い。

夏めく日新夫は捧ぐ玉串を 眞壽

添削・玉串を捧ぐ新夫や夏初め

駅頭の自転車組み立て若葉風
鑑賞・組立てた自転車でさっそうと若葉風
に乗出す姿が目には浮かぶ。

ヤエ子

修業僧の網白笠美し夏衣なり

幸

添削・新樹光修行の僧の網代笠

祝福や舞殿へ薫風抜ける

友子

添削・薫風や婚を寿ぐ巫女の舞

万緑を映す水面や平氏池

友子

つつじ咲くお宮参りか八幡で

直子

添削・花桐や八幡宮の宮参り

蓮池の泰然自若の空広き

幸

薫風や燈籠の石鮮しき

かおる

添削・薫風や石鮮しき段葛

松落葉横目で渡る太鼓橋

ツル

ひいらぎの青き実二つ表具店

幸

添削・夏落葉閉ぢられてみし太鼓橋

添削・夏の日へ青き実二つ表具店

若葉風神の通り道吹きぬける

かおる

夏の日や龍の迎へたる土産店

かおる

添削・神の道若葉の風の吹き抜くる

段葛ゆつくり歩く初夏日

直子

万緑と鳥居の赤の競い合ひ

邦子

添削・初夏やゆつくり向かふ段葛

ひるがほや先客見ゆる虚子の墓

朋子

添削・萍や囁くやうに鳩の居て

かおる

添削・ひるがほや先客のみし虚子の墓

葉桜の下歩き来て段葛

邦子

政子石いく年拝む十葉を

直子

添削・葉桜を抜けて若木の段葛

夏来る赤き社にぬかづいて

眞壽

新緑や波紋広がる太鼓橋

眞壽

添削・礼拝の本殿高し夏来たる

大路より直線にあり夏の海

幸

夏つばめ大連縄とひとつ駅

朋子

添削・直線の大路の果てや夏の海

十葉や古びた門に花咲かす

眞壽

新樹光白鳩の舞ふ池の上

ヤエ子

添削・十葉や門の来歴読み下す

添削・新樹光白鳩過ぎし池の照り

鎌倉彫りのぞく老舗の燕子花 ツル子
添削・鎌倉彫老舗の奥の燕子花

時空越え大姫政子の夏衣かな 幸
添削・大姫と政子の影や草いきれ

緑濃き天覧野外演習の地 幸
添削・新緑や天覧野外演習地

木々茂り弁財天の幟立つ 眞壽
添削・新樹光弁財天の旗ひとつ

檉落葉禰宜掃く後のまた落葉 ヤエ子
添削・夏落葉禰宜の背へ降りやまず

夏蝶のひとやすみする花屋先 友子
添削・夏蝶や小さき花舗のひと休み

本殿に参ひてたたむや日傘かな 邦子
添削・本殿の手前に畳む白日傘

鳥居より九夏入りたる段葛 かおる
添削・初夏の一の鳥居よ段葛

薫風に蓮の木葉見ゆ源氏池 直子
添削・蓮の葉の風の痕跡源氏池

(文責 代表 増田 守 不在投句 古野明
美、中村朋子)